

昭和46年 津村昭彦氏と結婚、二男に恵まれ、現在は夫と2人で生活。

## “60歳”からのエンジョイライフ「ウルトラマラソン」

私63才、息子2人、孫4人です。

2000年6月に開催された「しまなみ海道ウルトラ遠足」という広島県福山城からしまなみ海道の橋をわたり、今治城まで走る100Kのマラソン大会に、はじめて夫と一緒に参加しました。

前日に福山に泊まり、朝5時に福山城をスタート、21時までにはゴールする制限時間16時間の大会です。中間地点までは夫と一緒にでしたが、その後は一人になりました。当時は、ケイタイ電話を持っていませんでしたので、85Kの給水所のボランティアの人にゼッケンナンバー〇〇の人にこのメモをわたして下さいとお願いしました。内容は「〇時〇分、ここを通過、次の給水所で待っています。ミホコ」でした。30分位待つと夫がきました。

もう、あたりは暗いです。2人で歩き、たまには走りました。そして2人、手をつなぎゴールしました。制限時間の9時は、とっくに過ぎていました。係の人が「お帰りなさい」と迎えてくれました。はじめての100Kというキョリ、もううれしく、なんともいえない満足感で、足の痛みは忘れていました。と同時に「次の100Kの大会では、制限時間にゴールしたい」という気持がもくもくと出て来ました。

2001年、宮古島を一周する100Kの大会に参加し時間内ゴールできました。「なんで、100Kなんて走るの」と聞かれますが、足を前に一步一步出すだけの単調なスポーツですが、抜きつ抜かれつ走りながらも中間地点をすぎると私のまわりには、ランナーがいなくなります。時々出会うランナーと「きついですね」「どこから参加ですか？」と短い言葉をかけながら「お互いがんば

ばりましょう、ゴールしましょう」と別れ、また出会います。自動販売機で求めた飲み物を「半分どぞ」「ありがとう」「アメです、いかがですか」「うれしいわ」

ある時にお腹をなでている人がいたので「正露丸もっていますよ」「わー、神様に会いました」といわれました。

ランナー同志はげまし合いながら、ただただゴール目指します。

2004年宮古島100Kに参加した時のことです。

90K位であたりがまっ暗になり、前にいる男の人に「よかったら、一緒に行っていていいですか」と声をかけ、2人で「時間内に間に合いますね。ゴールまでがんばりましょう」と歩き、たまには走りました。ゴールで写真を撮ってくれるので「お兄さん、お先に」というと「いままで一緒だったんですよ。手をつないでゴールしましょう」と、うれしい言葉でした。2人は手をつなぎ高々と両手をあげゴールしました。ゴール地点は明るく男の人の顔を見たら息子より若い。「ごめんね、おばさんなの」というと「若いですよ。ボクは来年も参加しますよ」「私も参加します」「じゃ、来年、必ず会いましょう」と別れました。

そして、翌年の大会、65K地点で「津村さ～ん」と呼ぶ声。前年、一緒にゴールした〇〇です。お互いに手をにぎり、再会を喜び「ゴールで待っています」と約束し別れました。

私が少し先にゴールし、彼を待ちました。(2人共、時間内ゴール)翌日、空港に彼は友人達と、私共夫婦を見送ってくれました。そして「津村さん、来年も会いましょう」と。そして私は翌年も参加しました。

63才のおばさんランナーの私が、20代の若者と同じ趣味をもち、大会に参加でき、はげまし合い、喜びをわかちあえる。なんとすばらしいことでしょう。年齢は関係ない。これからも一步一步足を前に出すマラソンを通じ、出会い、再会を楽しみ、充実した60代、70代を生きてゆきたいです。